



と ころ
戸 高 だ よ り
福岡県立戸畑高等学校

令和7年度第14号

令和8年2月2日

校長 岡本 美加

言葉の力

思いがけない場面で、心動かされる言葉に出会うことがあります。23歳の時に『何者』で直木三十五賞を戦後最年少で受賞した作家の朝井リョウ氏は、高校生の頃、センター試験の国語の問題を読んで、問題を解かなくてははいけないことを忘れるほど、「何この素敵な文章」「きっと、今の自分にはわかりえない感情が書かれている」と感動したそうです。当時、自分が何に興味があるのか分からなかった朝井氏は、問題文の作者である堀江敏幸氏が早稲田大学で教鞭をとっていることを知り、「文化構想学部に行ったらこの人に会えるんだ!」と思い、志望校が定まり、進路を選択する一つの指針となったとのこと。また、先日ある中学校の入試問題で、2023年からパレスチナで起きていることをきっかけに書かれた詩が題材として使われ、話題になりました。一部を抜粋します。

おなまえ かいて ゼイナ・アッザーム 原口昇平 訳
あしに おなまえかいて、ママ
くろいゆせいの マーカーペンで
ぬれても にじまず
ねつでも とけない
インクでね
(略)
あしに おなまえかいて、ママ
ばくだんが うちに おちてきて
たてものがくずれて からだじゅう ほねがくだけでも
あたたたちのこと あしがしょうげんしてくれる
にげばなんて どこにもなかったって

問題文を読んだ小学6年生は、世界の紛争について考えたことでしょう。言葉には人生や社会を変える力があるのです。高校生のうちに読書や友人関係など様々な経験を通して、言葉の重みを理解する感性を育み、ふさわしい言葉を選ぶようになってください。そして、戸畑高校で学びあうことにより、失敗してもやり直し、折れても立ち直るしなやかさ(レジリエンス)も、身に付けてほしいと思います。



🌸 今日の一冊 🌸

『雪沼とその周辺』堀江敏幸

山間の寂びた町で暮らす人々の人生をしみじみと描いた短編集。2007年センター試験国語で出題された小説「送り火」を収録。堀江氏は早稲田大学教授で、朝井氏はそのゼミ生になり、文芸創作を学びました。

修学旅行

1月8日(木)から12日(月)、2年生は修学旅行で長野県、群馬県、東京都へ行きました。校訓「自主・調和」、吉田松陰の言葉「先ず地理を觀よ」、今年度のキーワード「学びあう」を柱に4泊5日を共に過ごしました。感想をいくつか紹介します。

- ・初めて行ったスキーでは、新しいことに挑戦することの大切さや面白さを再度確認することができた。
- ・ごはんがおいしすぎて、いつもの3倍くらい食べた。
- ・富岡製糸場を見学し、時代の流れと関わってきた人たちの頑張りが感じられた。
- ・東京班別研修では、普段見る街並みとは全く違うビル群や人の波から、日本の中核の力強さを肌で感じる事ができた。
- ・グループ活動なので、全員がやりたいようにできるわけではないが、譲り合うことも大切だと改めて分かった。
- ・一人では難しいことも、仲間がいれば乗り越えられることを実感した。
- ・初めて行く土地だからこそできた貴重な体験があった。
- ・社会や世の中を知ることができ、とても刺激になった。



一面の雪景色に
感激!
ナイタースキーも
楽しみました。

様々な場面で真摯に学びあう79回生をととても頼もしく感じました。更なる成長を期待しています。